

先月は阿蘇の豊富な資源「草」についてお伝えしました。今月は「木」についてです。
(資料提供：九州バイオマスフォーラム)

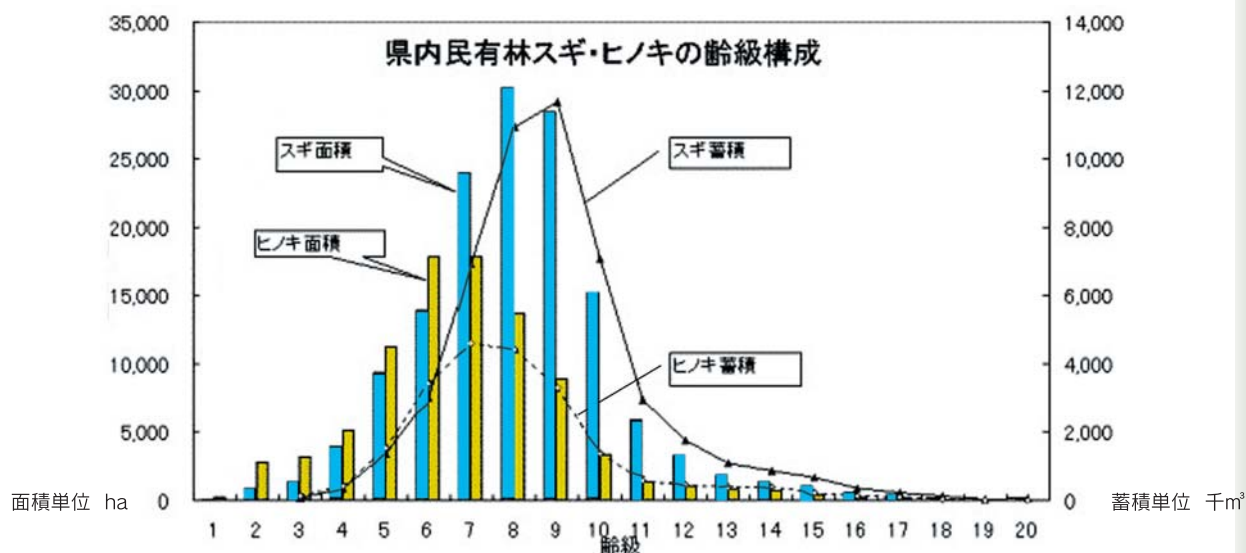


「木のバイオマス」

木を切る森林保全

森を守ろうというと、一般的には植林や違法伐採の禁止を思い浮かべますが、実は木を切る森林保全もあります。スギ・ヒノキなどの人工林の場合は適正に間伐しないと、木と木の間に日光が当たらなくなり、草が生えない真暗な森になります。そうすると、土が露出し、土地の保水能力が落ちてしまいます。阿蘇の中で植林した場所が、崩れやすくなるのはそういった理由と考えられます。木を切って適切に間伐しなければ、森の持つ保水能力は生きてこないのです。他にも木を切らねばならない理由があります。それは、「森の少子高齢化」の問題です。熊本県内の民有林の年齢構成（グラフ）を見ると、8 齢級が多いことが分かります。8 齢級というのは、植林してから 36 ～ 40 年経過した木のことで、材木として使える成熟した木のことです。植林してから、5 年ごとに 1 齢級あがります。7 ～ 9 齢級の量が多いのに対して、1 ～ 4 齢級（樹齢 1 ～ 20 年）は極端に少ないことが分かります。本来であれば、このような山形のグラフではなくて、どの年代も同じぐらいの数でないといけません。そうでないと、将来木材として使える木の安定供給ができなくなります。

今は、過去に植えた木が成熟しているので、どんどん切って新たに植林しなければならない時期に差し掛かっています。「森の少子高齢化」を防ぐには、適齢期を迎えた木を切って、植林して森を若返らせることが重要なのです。



(出典：(社)熊本県木材協会連合会)

若い森は地球温暖化の原因となるCO₂もたくさん吸収してくれます。

では、せっかく適齢期を迎えた木をどうして切つて利用しないのでしょうか？

意外と知られていない木材の自給率20%

食料の自給率は約40%ということはよく知られていますが、木材の自給率が約20%ということはあまり知られていません。国土の66%もの面積が森林であるにもかかわらず、どうしてこんなに自給率が低いのでしょうか？

その理由は、必ずしも木材価格が原因ではなく、海外産の木材が使い勝手がよく使われているからです。しかし、国産の木を使うことで、日本の森林が元気になるます。木を切つて使うことが、森林保全につながります。

林業はエネルギー産業？

スウェーデンでは、成長の早い柳の木を植えてエネルギー源にしているそうです。日本よりもはるかに寒く植物が成長しにくいところでも、エネルギー源のためだけに柳を植えているという努力は、数十年先を見越した国策に起因するようです。

しかし、よく考えてみると、木は昔から風呂や炊事などの燃料として使われてきました。今でも、阿蘇市内では薪ボイラーでお風呂を沸かしている方がおられます。北海道でも、灯油の価格が上がったため、薪ストーブがかなり売れているようです。高齢化が進む阿蘇では、薪割りが重労働なため、薪の宅配サービスという新ビジネスも生まれています。これまでは、灯油やガスが便利で安かったのですが、薪を使う人はずいぶん減りましたが、これだけ石油の値段が上がると、状況は変わってきます。これまで廃棄物扱いだった木のチップも、燃料として需要が急上昇し、奪い合いになっている地域もあるようです。灯油ストーブ並みに、自動点火・温度設定可能な高機能木質ペレットストーブなども販売されています。

最近の国内の木質バイオマスを使っている事例では、大阪市で建築廃材から自動車燃料用のバイオエタノールを作るプラントが稼働しています。熊本県や大分県でも、大津町や日田市に建築廃材や製材所から出る製材くずで火力発電をしているプラントがあります。

また、山口県では阿蘇市と同タイプのガス化炉で、製材所から出る木くずから電気と熱を作っています。もちろん、阿蘇市のアゼリア21のガス化プラントも、草だけでなく木のチップも燃料として

使うことができます。日本政府は、国産材の普及だけでなく、こうした木質バイオマスのエネルギーとしての利活用も積極的に推進しています。

あなたの家には、いまでは手入れもされず、放置されたままの山林があり

ませんか？その山林は、実は材木になる木もエネルギー資源もたくさんある宝の山なのです。ぜひ使ってください。

※内容についてのお問い合わせ先
市民環境課新エネルギー推進係
TEL 2223135

ススキを紙に！草の使い道たくさん

九州バイオマスフォーラムでは、草についてよく知ってもらおうと、学校などでススキを材料にした紙すきの体験学習を行っています。今年度は、中通小学校と坂梨小学校が体験。中通小では、山でのススキの収穫から取り組みました。10月に、学校から木落牧野まで登り、笹原瑞穂木落牧野組合長から有畜農家の作業や昔の営み、阿蘇の原野について説明を受け、実際に

カマを使ってススキ刈りに挑戦。



カマを使ってススキ刈りに挑戦。刈ったススキを笹原さんが束ね、数本のススキをサツとよつて紐をつくりキュッと結ぶ。その手さばきと先人たちの知恵に児童たちはとても興味を持ちました。

その後ススキは学校で柔らかくなるまで水に漬けて寝かせ、2月15日、待ちに待った紙すきを行いました。ススキの色や繊維でとてもステキに出来上がった紙を見て「卒業文集の表紙にしたい」とみんな大喜び。自然の素材を使った貴重な体験ができました。

